地域政策学ジャーナル
2020，第９巻(通巻第15号)，25-48

豊田珍彦『豊橋地方空襲日誌』を読む（８）

阿部　聖

Introduction of the Diary of Air-raid in Toyohashi Area during the Pacific War Written by Uzuhiko Toyota, Part 8

Sei Abe

要約：今回は，『豊橋地方空襲日誌』第四冊の３月20日から４月７日までを読み進めていく。米軍は４月１日の沖縄本島上陸に向けて準備を進め，まず海軍第58機動部隊が本州西部および中国・九州地域の飛行場や港湾を攻撃した。３月26日までに全機動部隊が慶良間列島に結集，空襲と艦砲射撃を加えて慶伊瀬島上陸を開始して，ここに沖縄戦が開始された。陸軍の第21爆撃機集団は，航空機工場などへの攻撃を継続する目的で，沖縄支援のため，特攻の出撃基地となっていた九州・四国地域の飛行場を連日爆撃，艦船の通路を遮断するため関門海峡，瀬戸内海域に機雷の投下を開始した。こうした戦況の新たな段階を反映しつつ，日誌は書き進められる。

キーワード：飛行場爆撃，機雷投下，沖縄戦支援，夜間低高度精密爆撃，特攻，P51

＜前号からつづく＞

三月二十日

(142) 昨日夕方から曇り出した空はやがて雨となるであらう。今にも泣きさうな表情だ。一昨日以来，敵機動部隊は，我が荒鷲の猛撃に多大の損害を蒙りながら，未だ我が沿岸を去らず，西日本の各地に少数機を以て侵入しつつあるが未だこの地方に及ばず。朝来小康を保つてゐた処，十二時十分前，突如，警戒警報が鳴り出した。素破こそ艦載機と色めき立つ中に，情報で南方洋上を北進する敵大型機二機があるといふ。何だまたＢ二十九かと張りつめた気も緩んでしまふ。それでも合図を打つて組内へ知らせる。組では昨日，一軒信州へ疎開して合せて十一軒，内八軒までは家持ちだ。残る三軒が借屋で家持が絶対多数なのは組の仕事をする上にどれだけ都合がよいか分らぬ。尤も，都合次第では今日ゐてもあすはゐないといふやうでは，力の入らないのも無理はない。そこでこれからはがっちりと組んで，この非常時局を乗り切らう。

其後の情報によると，その一機は伊勢湾から三河湾に入りしばらく旋回してゐたが，やがて南方洋上に去り，他の一機は浜松附近から侵入し，北へ北へと進んでとうとう長野県に入り，上田付近から東部管内へ去つたので僅か三十分で，〇時二十分，この警報は解除となつた。

侵入二機　一機は三河湾を偵察脱去，一機は浜松より長野を経て東部へ

［解説］３月20の日誌は「敵機動部隊は・・・未だ我が沿岸を去らず，西日本の各地に少数機を以て侵しつつあるが未だこの地方に及ばず」という記述からはじまっている。前号でも述べたように，米第58機動部隊は沖縄侵攻に備えるために，３月14日にウルシー環礁を出撃した。３月18日から21日に九州の飛行場を，19日には本

州西部の飛行場および神戸，呉，広島に停泊する軍艦を攻撃した[1)]。

日誌によれば，この日は11時50分頃に警戒警報が発令された。「南方洋上を北進する敵大型機二機」のうち，「一機は伊勢湾から三河湾に入りしばらく旋回して・・・やがて南方洋上に去り」，「他の一機は浜松附近から侵入し・・・長野県に入り，上田付近から東部管内へ去つた」。

米軍資料（第36表）によれば，WSM296～298，3PRM90～92の６機が来襲したことになっている。WSM297は目標が沖縄地域なので除外するとして，日誌が11時50分ごろの警戒警報の対象になった１機は，WSM298（横浜）と思われる。

朝日新聞（1945年３月21日付）は，20日午前中，B-29は４回にわたって本土に飛来したとして「第一次は一時頃四国方面から瀬戸内海上を行動，淡路島海面に焼夷弾を投下」「第二次は二時半過紀伊半島を経て大阪西方海面に爆弾を投下」「第三次は三時ごろ紀伊水道より侵入，淡路島上空を旋回」「第四次は八時三十分頃大阪西方に侵入，東進して名古屋，甲府を経て鹿島灘」と報じた。朝日新聞の第1次はWSM296（玉島）と思われるが，２～４次については，米軍資料から推算した日本への到着予定時刻と時間的にかなりの開きがあって，3PRM90～92かどうか判定しがたい。

なお，日誌は「組では昨日，一軒信州へ疎開して合せて十一軒」となったことが記されている。残る十一軒のうち，「八軒までは家持ちだ。残る三軒が借屋で家持が絶対多数なのは組の仕事をする上にどれだけ都合がよいか分らぬ」と述べているのは興味深い。

三月二十一日

（143）隔日にくる敵の夜間大空襲。その当り日は今夜だと誰の心にも油断はない。夜半もいつしか過ぎ半弦の月もとくに落ちた午前一時半，真暗な夜空に警戒警報のサイレンが鳴り出した。それこそとはね起きて戸外に出ると，宵迄曇つてゐた空が，嬉しや，すつかり晴れ渡り空一面に星が輝いて居る。それに風もなく寒さも二三日前を思ふとずつと緩んで来た。なる程暑い寒いも彼岸までとはよくいつたもので，今日はその彼岸の中日なのだ。情報に耳を傾けてゐると近畿地方から伊賀の上野附近をこちらにやつてくる敵一機があるといふ。何だ一機許りかと握つたこぶしのやりばがない。こやつ間もなく名古屋にやつてきた。遥かに高射砲の音が一二発聞へてくる。愈々くるなと待ち構へたが中々来る様子がない。暫くすると岡崎附近から渥美湾上空で旋回の後，伊勢湾に出て南方洋上に脱去したとの情報で一時五十分，この警報もあっさり解除された。

侵入一機　近畿より侵入，名古屋，渥美湾を経て脱去

［解説］３月21日は，「午前一時半，・・・警戒警報のサイレンが鳴り出」す。同機は，近畿地方から名古屋，渥美湾上空で旋回後，伊勢湾から洋上へ脱去，１時50分に警報解除となった。米軍資料（第36表）によれば，この日は気象観測爆撃機WSM299～301の３機が来襲したことになっている。ただ，米軍資料からは日誌に対応する気象観測爆撃機または写真偵察機は確認できない。少数機来襲に関する『朝日新聞』の報道なし。

三月二十一日

開戦以来，物資は日に日に窮屈となつて生活は脅かされ通し。然し，勝ちぬく為にはそれにも堪へ国民は戦つて来た。酒，煙草なども同様でこんな嗜好品などどうでもよい様なものの，これがなくては其日を送りかねる人も多かつた。

1）艦載機攻撃の様子については，くわしくは，工藤洋三（2018）『アメリカ海軍艦載機の日本空襲』70頁，参照。また同書によれば，18日に空母ベニントンから出撃した写真撮影機が戦艦大和の撮影に成功した。この結果，19日に空母ベニントンの艦載機が呉港等に停泊する大和をはじめとする艦船を攻撃したが，損害は軽微であった。この他，米国陸軍省編（1997）『沖縄―日本最後の戦闘』（外間正四郎訳）光文社（57～58頁）。およびRecords of the US Strategic Bombing Survey “*Aircraft Action Report*”, *No.15*, 1945/03/19（USS Bennington）参照。

第36表：1945年３月20日～25日の気象観測爆撃機および写真偵察機

月日	作戦	出撃時刻（マリアナ時間）	出撃時刻（日本時間）	到着予想時刻（日本時間）	帰還時刻（マリアナ時間）	目標（地域）
３月20日（火）	WSM296	191804K	191704	200004	G201065K	玉島航空機工場
	３PRM90	200159K	200059	200759	G201635K	神戸－大阪－名古屋
	３PRM91	200346K	200246	200946	G201815K	呉－玉島－神戸
	３PRM92	200457K	200357	201057	201608K	神戸－大阪－名古屋
	WSM297	200512K	200412	201112	G201850K	沖縄地域
	WSM298	200600K	200500	201200	G201955K	横浜ドック
３月21日（水）	WSM299	210200K	210100	210800		名古屋
	WSM300	［210516K］	［210416］	［211116］	G211916K	九州地域
	WSM301	［210658K］	［210558］	［211258］	G212058K	東京地域
３月22日（木）	WSM302	211801K	211701	220001		神戸
	３PRM93	220235K	220135	220835	G221555K	神戸－大阪－名古屋
	３PRM94	220225K	220125	220825	G221520K	名古屋
	WSM303	220630K	220530	221230	G222020K	沖縄地域
	WSM304	220604K	220504	221204	G221935K	神戸－大阪地域
	WSM305	221759K	221659	222359	G230635K	呉－高知地域
３月23日（金）	WSM306	230559K	230459	231159	G231730K	沖縄地域
	WSM307	230639K	230539	231239	231814K	四国－神戸地域
	313RSM4	231706K	231606	232306		関門海峡北部地域
３月24日（土）	WSM308	231836K	231736	240036	G240829K	名古屋
	WSM309	［240056K］	［232356］	［240656］	G241456K	浜松－東京地域
	３PRM98	［240156K］	［240056］	［240756］	G241556K	太田－郡山－福島
	３PRM95	［240230K］	［240130］	［240830］	G241630K	関門海峡
	３PRM96	［240205K］	［240105］	［240805］	G241605K	神戸－大阪－名古屋
	WSM310	［240540K］	［240440］	［241140］	G241940K	九州地域
３月25日（日）	WSM311	241830K	241730	250030	G251026K	神戸
	３PRM97	250225K	（中止）			関門海峡
	３PRM99	250336K	250236	250936	G251805K	名古屋地域
	３PRM100	250235K	250135	250835	G251935K	九州の飛行場
	WSM312	250606K	250506	251206	G252015K	沖縄地域
	WSM313	250610K	250510	251210	S252137K	呉－高知地域
	WSM314	251759K	251659	252359	S260647K	甲府

注：Ｋはマリアナ時間を表し，日本時間はＫマイナス１時間である。日本到着予想時刻は出撃時刻に７時間をプラスしている。元資料に出撃時刻の記載がない場合は，帰還時刻からB-29の平均的な往復時間である14時間をマイナスして出撃時刻を推定した。その場合は［　］に入れて示してある。

（出所）「作戦要約」より作成。

そこを察し，当局の努力で酒も月々少しづつは配給され，烟草も一日七本の割で交付されて来た。処が，過日の大空襲で俄然その烟草が配給不能となり，漸く今日から，一日二本の割で配給が継続されることとなつたとのお達し。一日七本でさへ随分と悩まされたのに，二本となつては進退これ窮まる。一層のこと，今日限り断然禁烟だ。これも戦ふ世なればこそ，戦地の兵隊を思へば何でもない。正歟，命に係はる程のこともあるまいではないか。

然し禁烟といふことは中々一通りや二通りの決心で出来るものでない。実をいふと，自分もこれ迄禁烟を決心したことが二度あつた。その第一回は，熊本の隊にゐた時，同僚と禁烟したが，僅か一週間許りで日露開戦となり，動員下令を見たのでその契りを破り，第二回は，今から二十年程前，何かの表裏で禁烟し，そのときは二ヶ年続けたが，体に故障が出来，医師の勧めでまた吸い出した。実際，禁烟となると，二日三日は病人のやうになり仕事も手に就かない。七日位の間の辛抱が出来れば跡は大いに楽になる。従て，凡そ一週間が成否の分岐点だ。それにこれ迄の禁烟は，自由に入手出来る時代であり，今度のはそふいかない処に環境の相違がある。戦ふ国

民の覚悟を示すためにもこの禁を守りぬきたいものだと思ふ。

(144) うららかな春がやうやうやつて来た。空は朝から晴れ渡り，昨日までの寒さはまるで忘れたかの様。ポカポカと暖かい。正午の気温五十二度。はじめて伸々とした気持ちになる。それにこの頃来，工作中の明年度町内会長もけさ受諾され詮考委員として一荷おろした形。この上は風呂でも沸し，去年十月以来の垢でも落し体まで軽くならふと沸しかかつた午後一時十五分，警戒警報のサイレンが鳴り出した。
情報を聞くと浜松南方洋上を北進する敵一機があるといふ。こやつ間もなく浜名湖附近に到達，名古屋に向ふだらうと予想を裏切り東北に進み静岡，富士山西方を経，やがて東部軍管内へ去つたので，僅か十分間でこの警報は解除されたが，偵察と見へどこにも投弾した模様はなかつたといふ。

侵入一機　浜名湖より侵入，東部管内へ去る

［解説］再び３月21日。「過日の大空襲で俄然その烟草が配給不能となり漸く今日から一日二本の割で配給が継続されることとなつた」。「一日七本でさへ随分と悩まされたのに二本」となり，「進退これ窮まる」状況となった。日本たばこ産業㈱ HP によれば，たばこに配給制が導入されたのは，1944年11月であった。配給制導入当初は１人１日６本であったが，1945年５月には５本となり，同年８月には３本に減量された[2)]。日誌では１日７本となっており，これが思い違いなのか，地域的なものなのか，それとも何か特別な理由によるものかは不明である。ともあれ「過日の大空襲で俄然その烟草が配給不能となり」２本に減量された。「過日の大空襲」というのは，いうまでもなく３月10日の東京大空襲に始まり名古屋，大阪，神戸，名古屋とつづく焼夷爆撃をさす。これら一連の大都市爆撃による被害は，一時的であったのかもしれないが，豊橋地域のたばこの配給に大きな影響を与えたものと思われる。
　そのようなことなら，「今日限り断然禁烟だ」「戦地の兵隊を思へば何でもない」と啖呵を切ってみたものの，これまで失敗に終わってきた禁煙の難しさを吐露していて，少々，ユーモラスでさえある。
　３月下旬に入り，正午の気温は華氏52度，摂氏で11度ほどになり，ようやく春らしくなった。「去年十月以来の垢でも落し体まで軽くならふと」風呂を沸かしにかかる。半年近くの間，風呂に入ってなかったということであろうか。風呂を沸かしにかかった13時15分に警戒警報が発令された。B-29の飛行コースや警報時刻からみて，WSM301（東京）と考えられる。

三月二十二日
(145) きのふ余りよいお天気だつた反動で今日は朝からのくもり。それもひる頃にはとうとう雨となつた。昼食を終つて一服ではない一休みして居ると，近畿地方へ侵入した敵一機。琵琶湖附近で旋回中だが東進の模様があるとて〇時五十分，本県にも警戒警報が発令された。果してこやつ鈴鹿こえで上野附近までやつてきた。左にカーブすれば名古屋へくる。右にカーブすれば逃げ口だ。どうするかと待つてゐると雲上をたしか逃げ口へ廻つたらしいので，僅か十分で愛知県の警報が解除となり，実に志摩半島を南方海上に脱去した二十分後には三重県の警報もまた解除となつた。

侵入一機　近畿より来り，三重県を南下脱去

［解説］この日の『朝日新聞』は，「硫黄島遂に敵手へ」と題して，２月19日の米軍上陸以来，日本軍部隊は約１ヵ月にわたって抵抗したが「十七日　最高指揮官を先登に全員総攻撃を敢行，敵中に突入，その後通信杜絶」などと１面トップで報じた。しかし，日誌はこの件については全くふれていない。この記事が紙面を占めることになったためか，この日は少数機の日本本土侵入についての報道はなされなかった。

２）日本たばこ産業 HP（https://www.jti.co.jp/Culture/museum/exhibition/1995/9512dec/tobhaikyu.html）参照。

「昼食を終つて一服ではない一休みして居」る12時50分に警戒警報が発令された。米軍資料によれば，22日にはWSM302～ WSM305の４機，3PRM93～94の２機，計６機が来襲したことになっている。警報の対象になったのはWSM304（神戸－大阪）であろう。

三月二十四日

（146）思ひを戦線にはせんに夢円らかならぬ午前〇時四十分，警戒警報が夜の大空をゆさぶるやうに鳴りひびく。この二三日敵の来襲不活発だつたのは嵐のまへの静けさで今夜当りまた編隊でくるのではなからうかと誰のこころにも油断はない。起きいでて見ると，風は可なり吹いてゐるが甚しくは寒からず。晴れたみそらに月が明るい。

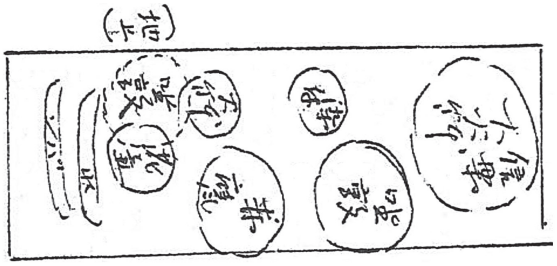
情報を聞くと伊勢湾に現はれた敵一機，名古屋をめざし北進中だといふ。十分後には東南から侵入したが投弾した模様もなくそのまま通り抜けて北進し，二十分後には北陸地方へ出て仕舞つたので一時十分，発令は一先づ解除された。

敵はその後引返して静岡県に出，南方洋上に脱去したらしいといふ。

侵入一機　中部横断　偵察

今度市では他都市からの疎開者，罹災者が追々やつてくるものとその受入のため寝具，食器の類を準備すると共に，市民自らの為にも衣類や食器を確保して置かうと町内会に指示があり，二十二日，町常会を開いてこれを議し各組へ割当が決定したので，その翌夜，即ちゆふべ組常会を開いて諸君に図つた処，進んで申出があり，組へ割当のふとん大小各二枚，衣類四点，食器若干点は忽ち決定を見た。尚，ふとんは必要あるまで各自保管，衣類と食器は市で取纏める関係上，婦人組長に二十八日迄に集めて貰ふやう頼んで置いた。

宅では，今朝，婆さんに手伝はせ待避壕から南へ約一間の所を長さ五尺巾三尺深さ三尺に掘り，これに陶磁器類を収容し直接に埋めて置いた。即ち，食器は大火鉢に収容し，茶器は坐敦の中に主として収容し，赤甕の中には七厘が入れてある。上層土の厚さは約一尺余。



坐敦　火鉢　染付　大火鉢
花盧　赤甕　坐敦　信楽

（147）夜は更けて月明かなれど吹く風さむい午后の十時半，警戒警報のサイレンに夢破られてはね起きる。情報をきくと南方洋上を北に進む敵数目標があり，その針路から見てまたまた名古屋を目指すらしいといふ。前の夜襲から丁度五日目。またぞろ来たなとお互ひ待機の配備につく。落付いたものだ。

十一時，敵いよいよ近く空襲警報が発令された。この頃，敵は志摩半島に近づいたが，何故か次々旋回して侵入しやうともしない。何だか後のやつを待合せるかの様な素振りに，さては敵め今夜は戦法をかへ，一時に四方八方から侵入し焼夷弾でもバラ撒かうというのかとも考へたが，さうでもなくやがて北進し次々に名古屋を襲ひ，浜名湖方面に逃出口を求ては我々の上空さしてやつてくる。それも初め数目標となり，遂に二十四五目標まで数えられた。皆，頭上を通つては二川方面さして消えてゆく。ただいつもと違ふのは，敵機真上に迫るころ前のがまだ東天に居り，後のがもう西天へ来て居るといふ程相接して居るから爆音は爆音と重なり，一方，待避の鐘は殆んど鳴り通しだ。そのうちに〇時半頃でもあつたらうか牛川の方から落下音と炸裂音が一所になつて聞へて来た。爆弾らしくないから焼夷弾かなぞであらう。続いて今夜は，南方向山方面からこれも焼夷弾であらう連続十余回の炸裂音が聞へて来た。火の事といへば，敵は今夜も焼夷弾を主としてバラ撒いたらしいのに，前回のやうに西方の天が明るく見へるやうなこともないから，名古屋市民必死の努力で損害を最小限度に喰い止めたであらう。焼夷弾でなく，爆弾だつたからそれに関した記事を取消す。

かくて丁度三時間を緊張の裡にすごし，敵機も大方脱出したので一時半，空襲警報は解除されたが，ま

だ少数機がウロ付いてゐたため警戒警報は二時二十分になつて漸く解除を見た。
尚，本夜敵が南方に落した弾は十余発の連続音に聞へたが，一向爆弾らしい様子もないから大型焼夷弾かなどの類であらう。これと同じ音が今夜敵機が通る少し前に前振れかなどのやうに遠くから聞へ，その度毎に雨戸がガタ付いた。初めは高射砲の音かとも思つたがさうでもないらしい。とに角今夜初めて出遭つた音なので今の処その正体は明かでない。

来襲百三十機　主として名古屋を襲ふ

［解説］３月23日は日誌の記載はない。米軍資料によれば，気象観測爆撃機 WSM306～307の２機とレーダースコープ写真撮影任務の313RSM4が１機の計３機来襲しているが，それぞれの目標地域が沖縄，四国―神戸，関門海峡であったことから，豊橋地域では警戒警報は発令されなかった。『朝日新聞』（1945年３月24日付）は，「B29一機は二十三日午前零時過から九州東岸を北上，広島附近に行動，同一時ごろ高知附近から脱去した，投弾なし」とのみ報じているが，これは WSM305（呉－高知）であろう。

同じく米軍資料によれば，３月24日は気象観測爆撃機 WSM308～ WSM311の４機と写真偵察機3PRM95～96と3PRM98の３機，計７機が来襲した。日誌には「午前○時四十分警戒警報・・・伊勢湾に現はれた敵一機，名古屋をめざし北進」したが，「一時十分発令は一先づ解除」となったとの記述があるが，これは WSM308（名古屋）である。その他の来襲機については，遠隔のため警報の対象にならなかったか，無視されたものと考えられる。

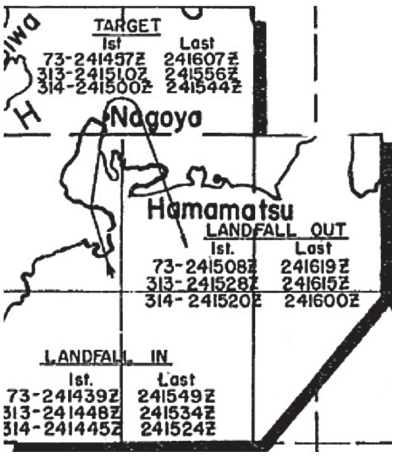
『朝日新聞』（３月25日付）は「B29八機各地偵察」との見出しで，①「B29一機・・午前零時ころ四国西方から侵入，山口を経て日本海に至りさらに浜田，広島を経て高知附近に投弾」②「同零時半ころ一機は志摩半島から侵入，名古屋附近の海中に投弾，富山，長野南部を経て駿河湾から脱去」③「同七時ころ一機が伊豆半島，駿河湾附近で旋回した」④「同八時ころ一機は九州南部から北上，山口県西部を偵察した」⑤「同八時半ころ一機は豊後水道から侵入，大阪，奈良，愛知方面を偵察，静岡方面から脱去」⑥「同八時半ころ一機は駿河湾から侵入，関東地方，福島県下を偵察水戸附近から脱去した」⑦「なほ他の一機は九州方面を偵察した」⑧「更に午後零時過再び一機が九州方面に侵入した」と報じた。これらは，313RSM4，WSM308～311，3PRM95～96および98に対応するものと思われる。

この日，「市では他都市からの疎開者・・・受入のため寝具，食器の類を準備すると共に，市民自らの為にも衣類や食器を確保して置かうと町内会に指示」があった。大都市からの疎開については，『豊橋市史』によれば，1844年１月の大都市疎開強化要項にもとづき，愛知県は名古屋市周辺都市にその受け入れ方を要請した。豊橋市でも同年３月に都市疎開対策委員会を設けて受入態勢を協議した。県から豊橋市への受入目標は320世帯で，同年５月までに314世帯を受け入れた。しかし，６月頃には疎開転入希望者が相次いで，これに応じきれない状況となったため縁故疎開外の受入は中断された。同年暮れには豊橋空襲がいつあってもおかしくない状況となり，逆に豊橋から他農村へ疎開する市民も出てきた[3)]。

このような状況にもかかわらず，３月10日からの10日間に大都市への焼夷空襲を受けて，被災した都市住民が縁故者を頼って豊橋へ疎開してきたということであろうか。組への割当分の「ふとん大小各二枚，衣類四点，食器若干点」を用意することになった。これと関連すると思われるが，庭に掘った壕に入れた食器等について記したメモが添付されていておもしろい。

24日は，夜になって，この日，２度目の警戒警報が10時30分に発令された。11時にはそれが空襲警報に変わった。次々に名古屋を襲ひ，浜名湖方面に逃出口を求ては我々の上空さしてや

３）『豊橋市史』285～287頁。



第50図：３月25日の名古屋空襲の飛行コース

（出所）「作戦任務報告書」No.45.

つて」来た。敵機は「初め数目標となり，遂に二十四五目標まで数えられた」と日誌は記している。敵機は「相接して」真上に迫り，「爆音は爆音と重なり，一方，待避の鐘は殆んど鳴り通し」という状況となった。その後，正確には25日になるが，「○時半頃でもあつたらうか牛川の方から落下音と炸裂音が一所になつて聞へて来た」。これは後に明らかになるが，向山町への一般目的弾の投下であった。

３月24日の日本時間15時52分から16時36分にかけて73航空団120機，313航空団79機，314航空団49機，合わせて251機のB-29が名古屋の三菱重工発動機製作所を攻撃目標として出撃した。主力部隊は，２発のM-76焼夷爆弾と積めるだけのM-64，500ポンド一般目的弾（以下，GPなどと記す）を搭載した。飛行ルートは，途中，硫黄島をチェックポイントとして北上し，大王崎を経て伊勢湾を通過，名古屋湾口を間接照準点（offset aim'g point）として目標の名古屋三菱重工発動機製作所へ向かった（第50図）。日本時間の25日00時00分～01時17分に高度5,656～9,800フィート（約1,713～2,969メートル）から251機のうち223機が第１目標にM-64，500ポンドGP1,194トン，M-76およびM-17，500ポンド焼夷弾312トンなどを投下した[4)]。

名古屋空襲を記録する会（1985）『名古屋空襲誌』（19頁）によれば，被害地域は，東，千種および東春日井郡守山町付近，その他市内栄，西，昭和北，中川，港，瑞穂，熱田など広範囲にわたり，それら地域の施設に大きな被害を受けた。

米軍資料によれば，73航空団の３機は豊橋と新宮に日本時間の00時04分から00時40分にかけて高度6,000～7,000フィートから17.2トンのM-64，500ポンドGPと１トンの焼夷弾を投下した。このうち豊橋に投弾したのは，１機でM-64，500ポンドGP35発（９トン），500ポンド焼夷弾２発（１トン）であった。

三月二十五日

朝来風聞する処によれば，今朝の敵は焼夷弾でなく主として爆弾を用ひ，向山の市の動物園にも爆弾が束になつて落ちたといふ。では，あの時のがさうたつたかと，すさまじい炸裂音が思ひ合される。どんな様子かと朝食を済していつて見ると，あの動物園の中へ七八つも落ちて大穴を開け，その一つなど大水槽の真中へ飛び込んで居る。穴から見ると飽海と同じく二百五十Ｋ級の爆弾らしく外に径一間足らずの小穴二三ヶ所ある。これは焼夷弾の落下した跡だといふ。つまり爆弾と焼夷弾を混用したのだ。このために水禽類の大金網が助かつた。外全部が目茶目茶となつて吹つ飛び，影も形もなく，内にゐた馬も獣も悉く死んだ。何よりだつたのは，猛獣類がとくに処置されてあつたことで，こんな騒ぎに獅子が飛び出たの，虎が逃げたのといつたら，爆弾以上に

4）Mark Lardas（2019）“*Air Campaign Japan1944-45 LeMay's B-29 strategic campaign*” Osprey Publishing, p.56によれば，ルメイによる夜間精密爆撃の実験の試みであった。これが成功すれば日本の脆弱な夜間防備を利用して，一般目的弾の在庫を消費することになった。３月24日に名古屋に向けて出撃，目標上空で照明弾を投下して，その５分後に10機程度がM-17集束焼夷弾を投下して火災を発生させ，後続の主力部隊が火災を目印にM-64GPを投下することになっていた。しかし，厚い雲に邪魔されて火災が見えず，作戦は失敗に終わった。目標の構内に着弾した爆弾は４％に過ぎなかった。この爆撃については第314航空団29爆撃群団43爆撃戦隊のパイロットの記録もある。Gordon B. Robertson（2016），Jr.,*Bringing the Thunder*, Wide Awake Books, pp.102-103.

大騒ぎをすることだらうに，その心配もなく済んで先づよかつた。

［解説］24日に爆弾が投下されたのは，向山町池下の動物園およびその周辺であった（第７巻第１号，第35図参照）。25日の日誌は，先ずその様子についての記述から始まっている。米軍資料にあるように「焼夷弾でなく主として爆弾」を投下，「動物園の中へ七八つもおちて大穴を開け」「他に一間足らずの小穴二三ヶ所」あった。豊橋市動物園はほぼ全壊，その様子を「全部が目茶目茶となつて吹つ飛び」猛獣類はすでに処置されていたとはいえ，「内にゐた馬も獣も悉く死んだ」。この結果，動物園は閉園となった。ちなみに，戦後，豊橋公園内（今橋町）に動物園施設が再開園されるのは1954（昭和29）年，現在の大岩町の豊橋子供自然公園内に移転するのは1968（昭和45）年である[5)]。

三月二十五日

（148）眠り盛りの三時間四時間を敵に起されて今朝は眼が渋い。けれどそんなこともいつて居られずいつもの時間には誰しもが起きる。そこが戦時だ。午前十時十分，警戒警報のサイレンがまた鳴り出した。初め情報を聞き洩したので侵入した経路など明かでないが，ゆうべの戦果を偵察でもするつもりだらう，敵一機が名古屋上空に侵入したが投弾した模様もなく，それより東に進み岡崎まで来たのでいよいよこちらへくるなと待ち受けた処，遂に姿を見せず。そのうちに情報で鳳来寺山，浜名湖を経て十時二十六分南方洋上に脱去したと伝へ，十時三十分に至りあつさりこの警報も解除された。

侵入一機　名古屋偵察

［解説］再び25日。「眠り盛りの三時間四時間を敵に起されて」とあるので，夜中に警戒警報が発令された可能性はあるが，不明である。そして，午前10時10分に警戒警報が発令された。このB-29は「名古屋上空に侵入したが投弾した模様もなく」豊橋を通過せずに洋上に脱去して，20分後には警報解除となった。

米軍資料（第36表参照）によれば，25日には気象観測爆撃機 WSM311～314の４機，写真偵察機3PRM97および3PRM99～100の３機が来襲したことになる。目標地域や警報時間からみて，警報の対象になったのは3PRM99（名古屋）であろう。「ゆうべの戦果を偵察でもするつもりだらう」「投弾した模様もなく」がそれを裏付けている。

朝日新聞（1945年３月26日付）によれば「B29一機は廿五日午前一時頃から約一時間に亙り四国東部，岡山，阪神地方を行動した後，志摩半島から南方洋上に退去」した。これは WSM311（神戸）と見られるが，これが「眠り盛りの三時間四時間を敵に起され」た要因であろうか。新聞は名古屋方面その他の来襲機についてはふれていない[6)]。

三月二十八日

（149）二十五日から敵機の影を見ないと思つたら昨日は百五十機で九州地方に来襲した。これは沖縄列島の一部へ強硬上陸するための掩護であることは勿論だが，今朝も笠原群島方面を北上する敵編隊ありとの情報もあり，注意を怠らなかつた処，丁度正午，警戒警報が発令され遠く近くサイレンが鳴り出した。素破こそ敵編隊と緊張したが情報で志摩半島をめざし北上して来た敵一機だときいて聊か張合ひ抜けの気持ちだ。それでも何れはこの上空へ姿を表はすかと待ち構へた処，敵はその後方向を東北にかへ，御前崎附近から侵入し東北進するので，僅か十五分許りで警報は解除になつた。こやつはそのまま進行を続け東部軍管内に去つたので〇時三十分，静岡県にも警報の解除を見たことだつた。

５）広報『とよはし』2010年８月１日号，３頁。
６）原田良次（1973）『日本大空襲』（下），中公新書は，３月20日以降25日までの少数機 B-29の来襲を次のように記すのみである。20日「〇九二〇，一二三〇 B29単機東京へ」，21日「一〇〇〇 B29一機飛来」，「〇九〇〇 B29一機東京に偵察来襲」。

第37表：1945年３月26日～31日の気象観測爆撃機および写真偵察機

月日	作戦	出撃時刻（マリアナ時間）	出撃時刻（日本時間）	到着予想時刻（日本時間）	帰還時刻（マリアナ時間）	目標（地域）
３月26日	WSM314-1	261132K	261032	261732		九州地域
	WSM315	260618K	260518	261218	S262050K	呉－高知地域
	WSM316	260612K	260512	261212	S261955K	東京－浜松地域
３月27日	WSM317	261804K	261704	270004		佐伯飛行場
	３PRM101	［270425K］	［270325］	［270225］	G271825K	九州地域
	WSM318	［270532K］	［270432］	［270332］	G271932K	呉－高知地域
	WSM319	［270605K］	［270505］	［270405］	G272005K	四国地域
３月28日	WSM320	［272021K］	［271921］	［280221］	G281021K	対馬海峡地域
	３PRM102	280211K	280111	280811	S281516K	神戸－大阪地域
	３PRM103	［280240K］	［280140］	［280840］	G281640K	九州の飛行場
	３PRM104	［280200K］	［280100］	［280800］	G281600K	九州の飛行場－広島地域
	WSM321	280626K	280526	281226	G282100K	東京地域
３月29日	WSM322	282030K	281930	290230		神戸－大阪地域
	WSM323	281811K	281711	290011		済州島地域
	３PRM105	290254K	290154	290854	G291640K	広島－呉
	３PRM106	（中止）				九州地域
	３PRM107	290203K	290103	290803	G291730K	九州地域
	WSM324	290721K	290621	291321	S292125K	対馬海峡
	WSM325	290618K	290518	291218	S292020K	東京地域
	313RSM5	291533K	291433	292133	T300656K, 300726K	瀬戸内地域
	WSM326	291754K	291654	292354	G300755K	神戸－大阪地域
３月30日	３PRM108	［300150K］	［292350］	［300650］	G301550K	南方諸島
	３PRM109	［300430K］	［300330］	［301030］	G301830K	郡山－太田地域
	WSM327	［300534K］	［300434］	［301134］	G301934K	横浜小倉石油
	WSM328	（中止）			S300630K	東京地域
	WSM329	301702K	301602	302302	G311114K	済州島地域
３月31日	３PRM110	310142K	310042	310742	G301550K	京都－名古屋
	３PRM111	310237K	310137	310837	G311730K	京都－名古屋
	３PRM112	310456K	310356	311056	G312330K	九州の飛行場
	WSM330	310616K	310516	311216	G312205K	対馬海峡
	WSM331	310605K	310505	311205	G312005K	東京
	WSM332	311758K	311658	312358	G312637K	済州島地域

注：Ｋはマリアナ時間を表し，日本時間はＫマイナス１時間である。日本到着予想時刻は出撃時刻に７時間をプラスしている。元資料に出撃時刻の記載がない場合は，帰還時刻からB-29の平均的な往復時間である14時間をマイナスして出撃時刻を推定した。その場合は［　］に入れて示してある。

（出所）「作戦要約」より作成。

［解説］日誌は26日，27日とB-29来襲の記載がない。米軍資料（第37表）によれば，26日は気象観測爆撃機WSM314-1およびWSM315～316の３機が来襲，27日はWSM317～319および3PRM101が来襲した。『朝日新聞』は，少数機に関しては「B29一機は二十六日午前零時半頃本土に侵入，甲府，八王子，横浜方面を行動」（1945年３月27日付），「廿七日午前零時ころ四国西部に侵入，大分，山口，広島各県および四国を行動，大分県佐伯附近に若干投弾」（同年３月28日）と報じた。前者はWSM316（東京－浜松）[7]，後者はWSM317（佐伯）である。

３月27日は沖縄戦支援に関連した，第XXI爆撃機集団による２つの大規模作戦が展開された。一つは，作戦任務番号46で，特攻機の出撃基地となっていた太刀洗，大分飛行場および大

7）『豊西村空襲記録』は，26日12時25分に警戒警報の発令と12時53分の同解除を記録，「駿河湾ヲ北進，富士山西方ヲ東部軍区へ侵入セリ」と報告している。

村航空機工場への第73および第314航空団による爆撃である[8)]。これは日誌の「百五十機で九州地方に来襲」が対応する。

もう一つは作戦任務番号47で，重要な艦船航路である関門海峡および周防灘への第313航空団による機雷の投下である[9)]。いずれも初めての作戦であった（前号，第30表参照）。なお，この機雷封鎖作戦は，スターベーション作戦（飢餓作戦）と呼ばれ，８月15日までつづけられることになる。

飛行場等への攻撃では，第73航空団のB-29は，太刀洗に向けて73機，大分に向けて39機，計112機が出撃，第314航空団の42機が大村に向けて出撃した。このうち，太刀洗には66機，大分には35機，大村には35機がM64GPをそれぞれ252.5トン，135.3トン，87.5トンを日本時間10時40分～11時42分にかけて高度4,393～5,544メートルから投下した。機雷投下では313航空団の102機が出撃，関門海峡[10)]または周防灘の目標地点に機雷を敷設した機数は94機，同目標敷設機雷数は2000ポンドMk25，264発および1000ポンドMk26またはMk36，549発，計837発であった[11)]。投下時刻は，日本時間の夜間22時37分から翌28日の０時42分，高度は1,484～2,424メートルであった[12)]。

ところで日誌によれば，３月28日には「丁度正午警戒警報が発令され」たが，15分で警報は解除された。米軍資料（第37表）によれば，この日は，気象観測爆撃機WSM320～321および写真偵察機3PRM102～104の計５機が来襲したことになっている。『朝日新聞』は「B29六機は各一機づつで二十八日昼間内地朝鮮を偵察した，うち四機は九州瀬戸内海方面，他の一機は朝鮮，別の一機は関東地方を行動した」（1945年３月28日付）と報じた。豊橋地域で午後12時に警報の対象となったのは，WSM321（東京）で，上記記事の「別の一機」であろう。

ところで，28日の写真偵察機3PRM104（九州の飛行場～広島地域）は，19日に次いで，呉港で戦艦大和をはじめとする144隻の日本海軍の主力を撮影することに成功した。そしてこれ以降も写真偵察機による日本海軍の監視をつづけたが，大和については一時見失った[13)]。

三月三十日

（150）敵の我が本土侵攻はいよいよ事実となつて現はれ，遂に沖縄列島へ野望を伸ばして来た。こうして西日本が主戦場となつた関係から，こちらに対しては敵機の来襲もここ暫くお留守勝ちだつた。

処が名古屋に対し二度目の空襲があつた二十四日から六日目の今夜またしても三度目の空襲を企て，マリアナから大挙してやつて来た。この六日間に世はすつかり春めき渡り，花には少し早いが寒くないのが，お互の活動にどれだけ好都合であるか分らない。時は午後十時二十分，月明の夜そらにサイレンが鳴り出した。まだ他から帰り寝についた許りだつたので，すぐ起きいでて待機する。

情報をきくと，志摩半島めざし北上してくる敵機編

８）沖縄戦での航空特攻としては３月26日に連合艦隊の天一号作戦が発動された（沖縄県［2017］『沖縄県史』127頁）。以後，特攻をふくむ陸海軍機による攻撃を散発的に実施した（同131頁）。

９）「関門海峡は，南方および大陸からの全ての船舶の航路に位置していて，『日本の船舶航路の単一にして最も脆弱な部分』として位置づけられていた」（工藤洋三［2019］「関門海峡への機雷投下と下関防備隊による掃海」『山口県地方史研究』第121号，82頁）。

10）1944年10月の米軍の報告書によれば，関門海峡を通過する船舶の80％以上は，瀬戸内海の港からのものか，あるいはそこへ向かうものであった。Revised Report of the Committee of Operations Analysts on Economic Targets in the Far East, 10 Oct. 1944, p.34参照。

11）米軍が使用した機雷は感応機雷で，磁気機雷，音響機雷，水圧機雷の３種類に大別できる。27日に投下された機雷は，磁気機雷25％，音響機雷75％であった。機雷の説明も合わせて，前掲，工藤（2019）84頁等参照。

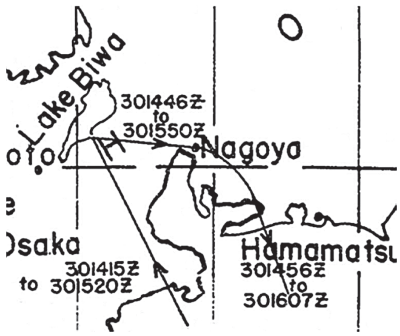
12）機雷の投下は，単機で低高度から間隔をおかず攻撃する計画が立案された（前掲，工藤［2019］83頁）。なお，米軍の機雷作戦までの経緯については，工藤洋三（2019b）「第313航空団による日本本土への機雷投下について」（第20回米軍資料の調査・研究に関する研究会）１～２頁参照。

13）３月28日の3PRM104による写真偵察の結果とその後の経緯については，工藤洋三（2011）『米軍の写真偵察と日本空襲』100～103頁。

隊があるといふ。どふやら，また名古屋がねらはれてゐるらしい。油断ならずと緊張する処へ，空襲警報が追いかけに発令された。名古屋も帝都と同様，前二回の空襲が相当手ひどくやられてゐるのに，今もまたやつてくるとは，敵の焦土戦術も徹底的であることが肯かれる。これに対し我が方も無為に敵を待つ筈もなく，次々に敵は伊勢湾まで侵入して来たが，邀撃する我が荒鷲のためその針路を阻まれ，目的地を前にして海上で旋回脱去するやうに装ひ，各地に分散し一部は近畿地方に遁れ，一部は間隙を縫ふて北陸地方へ侵入するなど，主力と見るべきものの壊滅により，十一時三十分になつて空襲警報は解除された。

かくてこの空襲も一段落と思ひきや十二時頃になると，各地に分散してゐた敵めが一機づつ，次々に名古屋を襲ひ，浜名湖に脱出口を求めてはこちらにやつて来る。其度ごとに待避の鐘が慌しく鳴る。三回，四回，五回と数へたころは昼の疲れで眠いこと夥しい。壕の中でついうとうとしたと見へ，警戒警報の解除に漸く意識をとり戻し時計を見ると，一時二十分で，今夜も正味三時間を要したが，然しこの附近に何らの事故なかつたことを祝福せずにはゐられない。

［解説］日誌に29日の記載はないが，米軍資料によれば，同日，気象観測爆撃機 WSM 322～326の５機，写真偵察機3PRM105～107（ただし，106は中止）の2機，そしてレーダースコープ写真撮影機313RSM5，２機の計９機が来襲している。九州地域の気象観測機や写真偵察機が多いことが注目される。また313RSM5（瀬戸内）は，スターベーション作戦の一環であろうか，この２機はそれぞれ500ポンド GP ８発を投下した。『朝日新聞』は「B29一機は二十九日午前四時頃四国西部に侵入・・・引続き B29一機は同地方に侵入・・・また B29各一機は二十九日午前九時過ぎから午後一時の間に南鮮沿岸および北九州要地を偵察，別に同一機は十二時過ぎ関東地方を偵察」（1945年３月30日付），「二十九日午後十一時前高知より侵入した一機は瀬戸内海，大阪を経て和歌山県下に投弾・・・同じく十一時過ぎ四国西部から侵入した一機は岡山南方の海上に投弾」などと報じた。



第51図：３月30日の名古屋空襲の飛行コース

（出所）「作戦任務報告書」No.48.

３月30日の日誌は，夜の10時20分に警戒警報が発令され，「名古屋に対し・・・今夜またしても三度目の空襲を企て」たと記している。米軍資料（「作戦任務報告書 No.48」）によれば，この日の23時46分から翌31日０時50分にかけて，第314航空団の B-29が第１目標である三菱重工名古屋発動機製作所を爆撃した。14機が出撃した。飛行コースは，グアムを出撃後，硫黄島をチェックポイントとして北上し，三重県大紀町を上陸地点とし，滋賀県の堅田付近（いわゆる琵琶湖の首）を IP として，右旋回して名古屋へ向かった（第51図）。出撃した14機のうち12機が第１目標に，高度2,060～2,396メートルから M-64，500ポンド GP，199発（49.8トン）等を投下した[14]。

名古屋空襲を記録する会（1985）『名古屋空襲誌・資料編』（20頁）によれば，千種区，東区，昭和区などで，死者29人，全焼・全壊家屋61戸の被害を出した。

また，同日には，313第航空団の B-29による２度目の機雷封鎖作戦が行われた。94機が日本時間17時00分から19時34分にかけて出撃，このうち87機が23時53分～翌31日２時48分にかけ

14）「作戦任務報告書」No.48.

て，関門海峡，呉－広島湾，広島地域，佐世保地域に機雷を投下した（作戦任務 No.49）。第１目標に投下された機雷は，2000ポンド Mk25，204発，1000ポンド Mk26＆36，603発，計807発であった。

米軍資料（第37表）によれば，30日の少数機は，気象観測爆撃機 WSM327～329（ただし，WSM328は中止）の２機，写真偵察機3PRM108～109の２機，計４機が来襲しているが豊橋地域では警報の対象にはならなかったようである[15]。

『朝日新聞』は，「三十日午前零時ころ一機は四国南部より侵入，兵庫県西部から北上して日本海に至り，若狭湾を偵察・・・同じく八時半ころ静岡県地区より侵入した一機は山梨，群馬を経て福島に至り，同県南部より脱去・・・別に同時刻ころ一機は大島および房総南部を偵察」「一機は卅日午前九時過ぎから約一時間にわたり対馬から満鮮方面を偵察，別に同十一時半頃から十二時頃にかけて関東地区に侵入，帝都深川区内に少数の爆弾を投下」（いずれも３月31日付）と報じた。「静岡県地区より侵入した一機」は3PRM109（郡山－太田），「関東地区に侵入」した一機は，WSM327（横浜）であろう。

ところで日誌は冒頭で「遂に沖縄列島へ野望を伸ばして来た」と記しているが，米軍は４月１日の本島上陸のための準備を着々と進めていた。米第58起動部隊は，３月23日に沖縄本島はじめとする南西諸島全域に対して，艦載機攻撃を開始した。また，同月24日からは沖縄本島南部地域への艦砲射撃を開始した。こうしたなか，米軍七十七歩兵師団が26日から29日にかけて座間味島，渡嘉敷島など数島へ，31日には慶伊瀬島に上陸した。『沖縄県史』（各論編６沖縄戦）は，「上陸前からの米軍の『第五八起動部隊や護衛空母から出撃した』『延べ三〇九五機』による空襲，それに艦船からの艦砲射撃は熾烈を極めた」（107頁）と記している。一方で，既述のように B-29による関門海峡はじめとする港湾，海峡への機雷投下，西日本地域の飛行場への爆撃が行われていたのである。

三月三十一日

（151）西から来て名古屋をめざす敵一機のために八時半少し過ぎ警戒警報の発令を見たがこの敵は名古屋北方を瀬戸方面に出て東進の模様だといふ。この他上空を通つて浜名湖へ出るのかと待ち構へた処，ずっと奥三河を通り浜名湖から南方洋上へ脱去したとて八時五十分警戒警報は解除された。

（152）九時三十分またまた警戒警報のサイレンが鳴り出した。琵琶湖附近から投北進する敵一機ありと情報はいふ。まもなく敵機は名古屋上空を経て東進中だといふ。今度こそはと待ち構へた処，遂に姿を見せず遥か北方を通つて浜名湖に出南方に脱去したらしく九時四十分この警報も解除された。

［解説］３月31日は，日誌によれば「八時半少し過ぎ警戒警報の発令」，そして「九時三十分またまた警戒警報」とあるように２度の来襲が記されている。いずれも短時間で警報は解除された。米軍資料（第37表）によれば，この日，写真偵察機3PRM110～112の３機，気象観測爆撃機 WSM330～332の３機，計６機が来襲したことになっている。日誌の２機は3PRM110（京都－名古屋）と3PRM111（京都－名古屋）と考えられる。

『朝日新聞』（1945年４月１日）は「B29各一機は五次にわたり九州ならびに本土各地へ飛来した。第一次は午前八時すぎ四国方面より侵入，近畿ならびに東海地区を経て浜名湖附近より脱去，第二次は同九時頃中部地区より侵入，東海地区を経て南方へ脱去した，同十一時過ぎ九州南部より侵入，九州北部を一巡し東南方海上に脱去した，第四次は正午前東海地区より侵

15）『豊西村空襲記録』によれば，30日の少数機侵入に対しては，８時25分と11時34分の２回，浜松地域で警戒警報が発令された。

入，帝都一部に投弾後退去した，第五次は正午過ぎ九州南部より侵入，九州各地を偵察後南方に退去した」などと報じた[16]。

31日には，沖縄作戦支援の一環として作戦任務番号50，九州の飛行場（太刀洗，大村飛行場等）に対する爆撃作戦が行われた。この作戦には，第73および第314航空団の152機が出撃，太刀洗機械工場と大村飛行場に対して，日本時間10時40分～11時42分にかけて，高度約4,3935～5,484メートルからM-64，500ポンドGPとM-43，500ポンドGPを合わせて2,146発（536.5トン）を投下した。

こうして，沖縄本島上陸作戦開始の４月１日を迎える。本島上陸の時間は，日本時間８時30分とされ，５時30分からは上陸地点である読谷，嘉手納，北谷の海岸へ，陸と海から３時間におよぶ激しい攻撃が行われた[17]。日本軍の反撃はなく，この日のうちに６万人の米兵が上陸し，読谷，嘉手納両飛行場を確保した。日本軍はすでに「侵攻軍を水際で撃滅するという作戦を変え，中央部の堡塁を中心に強力な抵抗線を展開させる」とともに，「帝国海軍の主力とともに残った飛行機のほとんどを動員して・・・米海軍や沖縄沖に浮上する艦隊を撃滅して，陸にあがった米地上軍を孤立化させ，弱体化しようと考え・・・この計画達成のため，日本軍は主に日本海軍特別攻撃隊“神風”による体当たり戦法[18]」にたよった。

４月の日誌の内容に入る前に第XXI爆撃機集団による４月中の作戦について整理しておきたい。第38表は，４月中の爆撃作戦と出撃機数，投下された爆弾または機雷の種類，爆撃時間，爆撃高度についてまとめたものである。まず気づくことは，異様ともいえる出撃回数の多さである。１ヵ月間に81回の出撃が行われている。その大半の63回は，いわゆる特攻の基地と考えられていた，九州地域の鹿屋，国分，鹿屋東，出水，串良，宮崎をはじめとする飛行場への爆撃であった。攻撃部隊は少ないときで10機，通常20機程度，最も多いときでも37機で，連日行われた。第１目標および第２目標として４月中に爆撃された回数は，鹿屋飛行場10回，同様に国分10回，宮崎８回，鹿屋東７回，出水・串良が６回などであった。飛行場への攻撃と同じく３月末から始まったスターベーション作戦は，４月上旬に集中して５回行われており，呉および広島水域，関門海峡が目標とされた。航空機工場や市街地等に対する爆撃もひきつづき行われた。従来からの中島飛行機製作所，三菱重工名古屋発動機製作所の他，地方の航空機工場・軍工廠，そして川崎と東京市街地が対象となった。

飛行場に対する爆撃では，使用された爆弾はM-64，500ポンドGPが使用されることが多いが，４月17～18日，21日にはM-81，260ポンド破砕爆弾，T4E4，500ポンド破砕集束弾が投下されている。同時期を含めて一般目的弾と破砕爆弾の混投のケースも見られる。また，一般目的弾とM-47A2，100ポンド焼夷弾が混投されるケースも少ないが見られる。投下時間は，７時台から10時台にかけてが最も多く，爆弾投下高度は，最低が13,500フィート（約4,090メートル），最高が26,615フィート（約8,064メートル）であった。

航空機工場および市街地等への爆弾投下は，４月は前半に集中している。投下爆弾は，M-64が中心で，M-76，500ポンド焼夷弾やM-47A2が混投されるケースもあった。川崎，東京両市街地に対してはE-46，500ポンド集束焼夷弾やM-47A2などの焼夷弾中心に投下された。航空機工場等に対する爆弾投下時間は，４月３日の立川飛行機会社までは夜間に低高度（6,000～

16）前掲，原田良次（1973）（下）は，３月26日から31の少数機B-29の来襲を次のように記している。28日「一二二〇 B29一機東京に」，29日「一三〇〇 B29一機東京に」，30日「〇九〇〇，一二〇〇 B29単機東京へ来襲，その一機は伊豆より京浜地区に侵入投弾す」31日「一三一〇 B29一機東京に来襲投弾す」。

17）沖縄戦のようすについては，米軍陸軍省編（1948）『沖縄－日米最後の戦争』（外間正四郎訳），光文社，前掲，『沖縄県史』等，参照。

18）前掲，米陸軍省編（1948），111～112頁。

第38表：1945年４月の大規模爆撃の投下爆弾，爆撃時間，爆撃高度

No.	月日	第１目標・（　）内レーダー第１目標	航空団（　）内出撃機数	主要投下爆弾	投弾時間（日本時間）	投弾高度（ft）
51	４月１日	中島飛行機武蔵製作所	73（116）	M-64, M-26	02：02～03：29	5,830～7,960
52	４月１日	スターベーション［呉湊］	313（6）	Mk26	10：02～10：33	25,700～26,450
53	４月２日	スターベーション［広島水域］	313（10）	Mk25, Mk26＆36	00：16～00：36	6,000～6,100
54	４月３日	スターベーション［広島水域］	313（9）	Mk25, Mk26＆36	23：10～23：45	6,000～6,150
55	４月３日	静岡航空機工場	314（48）	M-64, M-76, M-26, MK6	01：30～03：35	7,000～9,000
56	４月３日	小泉飛行機製作所	313（78）	M-64, M-46, M-26	01：14～02：41	7,000～7,600
57	４月３日	立川飛行機会社	73（113）	M-64, M-64A1, M-47A2, M-26, M-90	02：30～04：06	5,700～7,200
58	４月７日	中島飛行機武蔵製作所	73（107）	M-66	10：00～10：06	12,000～16,400
59	４月７日	三菱重工名古屋発動機製作所	313・314（194）	M-64	11：03～12：54	16,000～25,000
60	４月８日	鹿屋飛行場・（鹿児島市街地）	73（32）	M-64	10：29～10：52	17,000～19,300
61	４月８日	鹿屋東飛行場・（鹿児島）	313（21）	M-64	10：32～10：35	17,000～18,000
62	４月９日	スターベーション［関門海峡］	313（20）	Mk25, Mk26＆36	00：40～01：16	5,000～6,300
63	４月12日	中島飛行機武蔵製作所	73（114）	M-66	11：08～11：21	12,000～17,500
64	４月12日	保土ヶ谷化学工業会社	313（82）	M-64A1	11：20～12：30	7,000～15,000
65	４月12日	郡山化学工業会社	314（85）	M-64	11：33～12：23	7,000～9,000
66	４月12日	スターベーション［関門海峡水域］	313（5）	Mk25, Mk26＆36	00：46～01：16	6.850～7,110
67	４月13日	東京陸軍造兵廠地域	73・313・314（348）	E-46, M-64, M-46, M47A1, M-59	22：57～02：36	6,750～11,000
68	４月15日	川崎市街地	313・314（219）	E-46, M-64A1, M-47A2, M-46, T4E4	22：43～00：56	6,420～10,020
69	４月15日	東京市街地	73（118）	E-46, M-47A2, M-64, M-46	22：25～23：55	8,000～10,100
70	４月17日	出水飛行場	73（22）	M-81	14：28～14：29	15,300～16,100
71	４月17日	太刀洗飛行場	73（21）	M-81	14：51～15：00	15,000～16,400
72	４月17日	国分飛行場	313（24）	M-81	14：30～14：38	16,000～17,300
73	４月17日	鹿屋東飛行場	313（21）	M-81	14：47～14：50	16,000～17,600
74	４月17日	新田原飛行場	314（10）	T4E4	15：10～	18,000～18,500
75	４月17日	鹿屋飛行場	314（34）	T4E4	14：38～14：44	17,800～19,400
76	４月18日	太刀洗飛行場・（大村飛行場）	73（21）	M-81, M-57	07：41～07：54	15,000～15,400
77	４月18日	鹿屋東飛行場・（国分飛行場）	313（20）	M-64A1, T4E4	07：55～08：18	16,000～16,500
78	４月18日	鹿屋飛行場・（鹿屋東飛行場）	314（33）	T4E4	07：50～07：58	18,000～19,140
79	４月18日	出水飛行場	73（23）	M-81, M-57	07：29～07：58	15,390～16,300
80	４月18日	国分飛行場	313（22）	M-81, M-57	07：45～08：34	16,000～17,000
81	４月18日	新田原飛行場	314（11）	T4E4	08：03～09：22	18,000～18,200
82	４月21日	大分飛行場	73（30）	M-64	06：55～06：56	14,300～15,300
83	４月21日	鹿屋東飛行場	313（33）	M-64	07：09～08：01	16,200～17,350
84	４月21日	鹿屋飛行場	314（33）	T4E4	07：04～07：35	16,000～17,800
85	４月21日	宇佐飛行場	73（30）	M-64	08：11～08：22	14,500～15,800
86	４月21日	国分飛行場	313（35）	M-64	08：20～08：53	12,000～14,000
87	４月21日	串良飛行場	314（28）	M-64	08：59～09：07	17,400～17,675
88	４月21日	太刀洗飛行場	73（21）	M-64	09：03～09：04	18,500～19,200
89	４月21日	出水飛行場	313（16）	M-64	07：14～08：49	14,100～14,500
90	４月21日	新田原飛行場	314（23）	M-64, T4E4	08：25～08：34	15,000～16,500
91	４月22日	出水飛行場	73（21）	M-64	07：52～08：05	16,000～18,000
92	４月22日	串良飛行場	313（18）	M-64	07：58～08：45	16,000～16,600
93	４月22日	宮崎飛行場	314（22）	M-64	07：34～09：10	14,000～17,500
94	４月22日	富高飛行場	73（18）	M-64	08：36～	16,450～17,500
95	４月22日	鹿屋飛行場	313（25）	M-64	07：34～08：36	15,350～15,950

96	４月24日	日立航空機立川工場	73・313・314（131）	M-64	08：52～09：05	10,000～14,500
97	４月26日	宇佐飛行場	73（21）	M-64	07：16～07：44	15,500～26,500
98	４月26日	大分飛行場	73（22）	M-64	06：13～07：07	13,500～24,000
99	４月26日	佐伯飛行場	73（23）	M-64	06：53～07：18	20,800～25,390
100	４月26日	富高飛行場	73（22）	M-64	06：07～07：45	13,000～24,500
101	４月26日	松山飛行場・（今治飛行場）	313（37）	M-64	08：47～09：32	22,800～26,615
102	４月26日	新田原飛行場	313（23）	M-64, M-47A2	08：40～08：58	13,700～25,000
103	４月26日	宮崎飛行場	313（21）	M-64	09：18～10：19	13,500～19,000
104	４月26日	鹿屋飛行場・（国分飛行場）	314（22）	M-64	09：52～10：14	20,000～27,000
105	４月26日	串良飛行場	314（22）	M-64	10：04～11：03	22,000～29,000
106	４月26日	国分飛行場	314（22）	M-64	09：54～10：39	15,300～28,850
107	４月26日	都城飛行場・（宮崎飛行場）	314（21）	M-64	10：15～10：56	19,600～23,000
108	４月27日	出水飛行場	73（22）	M-64	08：46～09：45	15,800～17,700
109	４月27日	宮崎飛行場	73（21）	M-64	09：30～09：34	11,950～12,900
110	４月27日	国分飛行場	313（22）	M-64, M-47A2	08：37～08：58	10,310～12,000
111	４月27日	都城飛行場	313（18）	M-64	09：17～09：51	10,000～12,000
112	４月27日	鹿屋飛行場	314（21）	M-64	08：53～08：55	16,000～17,020
113	４月27日	串良飛行場	314（19）	M-64	08：25～08：31	15,000～17,160
114	４月28日	出水飛行場	73（24）	M-64	08：50～08：58	15,775～17,380
115	４月28日	宮崎飛行場	73（20）	M-64	09：52～09：53	11,500～12,800
116	４月28日	国分飛行場	313（20）	M-64	09：12～09：13	12,000～12,250
117	４月28日	都城飛行場	313（19）	M-64	08：51～08：52	11,000～12,000
118	４月28日	鹿屋飛行場	314（23）	M-64	08：53～08：57	15,000～17,000
119	４月28日	串良飛行場	314（23）	M-64	08：25～08：27	16,200～17,800
120	４月29日	宮崎飛行場	73（21）	M-64, M-30	07：58～	15,400～15,950
121	４月29日	都城飛行場	73（23）	M-64, M-30	07：17～07：20	14,920～16,600
122	４月29日	国分飛行場	313（22）	M-64, M-47A2	07：05～07：06	12,300～13,000
123	４月29日	鹿屋東飛行場	313（15）	M-64	07：21～07：22	14,000～14,500
124	４月29日	鹿屋飛行場	314（20）	M-64	08：25～08：36	17,500～18,500
125	４月29日	串良飛行場	314（20）	M-64	08：54～08：57	17,200～17,600
126	４月30日	立川陸軍航空工廠，浜松市	73・313（105）	M-64, M-47A2	10：22～10：54	17,800～21,500
127	４月30日	鹿屋飛行場	314（11）	M-64	10：40～	18,200
128	４月30日	鹿屋東飛行場	314（11）	M-64	10：38～	17,100
129	４月30日	国分飛行場	314（10）	M-64	10：42～10：44	17,200～17,900
130	４月30日	大分飛行場	314（11）	M-64	10：13～10：14	17,270～17,900
131	４月30日	富高飛行場	314（12）	M-64	10：14～10：15	16,900～17,550
132	４月30日	佐伯飛行場	314（11）	M-64	10：13～	17,100～17,700

（出所）工藤洋三企画・制作『XXI Bomber Command Tactical Mission Reports Mission No.26～ No.331』（2009年版）および小山仁示訳『米軍資料　日本空襲の全容』東方出版，1995年より作成。より作成。

9,000フィート）で行われたが，４月７日の中島飛行機武蔵製作所への攻撃以降は，10時～11時前後に変化した。また，投下高度も12,000～25,000フィート（約3,636～7,575メートル）に変更された。従来，航空機工場に対しては昼間，高高度（25,000～30,000フィート）からの精密爆撃という方法をとっていたが，３月24日の三菱重工名古屋発動機製作所から夜間，低高度からの精密爆撃ともいうべき方法に変化した。しかし，夜間の低高度からの精密爆撃は失敗に終わったようで，高度は若干下がったとはいえ，従来の爆撃法に戻ったといえる[19]。市街地については，夜間に低高度低高度からの焼夷爆撃のままであった。

19）Mark Lardas（2019）p.56は，次のように述べている。ルメイは複数の航空団による夜間精密爆撃が機能しなかったため，個別に実施することにして，３月30日～４月１日にかけて314航空団のB-29，14機を三菱重工名古屋発動機製作所へ，４月１日には73航空団の121機を中島飛行機武蔵製作所へ向けて出撃させた。しかし，完全に失敗に終わった。

第39表：1945年４月のB29本土空襲における目標上空の天候・第１目標投弾機数・損失機等

No.	月日	第１目標・（　）内レーダー第１目標	第２目標	目標上空の天候	第１目標投弾機／出撃機数	第２目標投弾機	その他有効機	損失機	死者・（　）内不明者数
51	４月１日	中島飛行機武蔵製作所	なし	晴れ	116/122			6	12（53）
52	４月１日	スターベーション［呉湊］	なし	視界良好	6/6				
53	４月２日	スターベーション［広島水域］	なし	3/10	9/10				
54	４月３日	スターベーション［広島水域］	なし	1～10/10	9/9				
55	４月３日	静岡航空機工場	なし	0～2/10	48/49				
56	４月３日	小泉飛行機製作所	東京市街地	10/10	48/78	18			
57	４月３日	立川飛行機会社	川崎市街地	9～10/10	64/113	47	1	1	0（11）
58	４月７日	中島飛行機武蔵製作所	なし	0～2/10	101/107		1	3	0（34）
59	４月７日	三菱重工名古屋発動機製作所	なし	0～2/10	151/194		28	2	0（23）
60	４月８日	鹿屋飛行場（鹿児島市街地）	出水飛行場	10/10	29/32				
61	４月８日	鹿屋東飛行場（鹿児島）	国分飛行場	10/10	6/21（13）			1	1（6）
62	４月９日	スターベーション［関門海峡］	なし	8～10/10	16/20				
63	４月12日	中島飛行機武蔵製作所	なし	濃霧～2/10	94/114	11	2		
64	４月12日	保土ヶ谷化学工業会社	なし	晴れ	64/82		11		
65	４月12日	郡山化学工業会社	なし	晴れ	71/85		6	2	10（4）
66	４月12日	スターベーション［関門海峡］	なし	もや	5/5				
67	４月13日	東京陸軍造兵廠地域	なし	視程無限	328/348		4	7	0（78）
68	４月15日	川崎市街地	なし	晴れ～3/10	194/219		1	11	0（125）
69	４月15日	東京市街地	なし	晴れ～3/10	109/118			1	0（0）
70	４月17日	出水飛行場	なし	晴れ	20/22		2		
71	４月17日	太刀洗飛行場	なし	晴れ	21/21				
72	４月17日	国分飛行場	なし	晴れ	20/24		1		
73	４月17日	鹿屋東飛行場	なし	晴れ	20/21				
74	４月17日	新田原飛行場	なし	晴れ	7/10				
75	４月17日	鹿屋飛行場	なし	晴れ	30/34				
76	４月18日	太刀洗飛行場（大村飛行場）	なし	晴れ	20/21		1	2	2（18）
77	４月18日	鹿屋東飛行場（国分飛行場）	なし	0～10/10	19/20				
78	４月18日	鹿屋飛行場（鹿屋東飛行場）	なし	2～7/10	30/33		1		
79	４月18日	出水飛行場	なし	晴れ	21/23		2		
80	４月18日	国分飛行場	出水飛行場	0～3/10	19/22		1		
81	４月18日	新田原飛行場（宮崎飛行場）	なし	2～7/10	11/11				
82	４月21日	大分飛行場	なし	0～1/10	17/30		12		
83	４月21日	鹿屋東飛行場	なし	0～2/10	27/33		4		
84	４月21日	鹿屋飛行場	なし	0/10～濃いもや	30/33		1		
85	４月21日	宇佐飛行場	なし	0～1/10	29/30				
86	４月21日	国分飛行場	なし	0～3/10	34/35				
87	４月21日	串良飛行場	なし	0～3/10	28/31				
88	４月21日	太刀洗飛行場	なし	0～1/10	17/21		1		
89	４月21日	出水飛行場	なし	0～3/10	13/16		3		
90	４月21日	新田原飛行場	なし	0～3/10	22/23				
91	４月22日	出水飛行場	なし	0/10	19/21		1		

92	４月22日	串良飛行場	なし	0/10	9/18		5		
93	４月22日	宮崎飛行場	なし	0/10	22/22				
94	４月22日	富高飛行場	なし	0/10	18/18				
95	４月22日	鹿屋飛行場	なし	0/10	19/25			1	0（0）
96	４月24日	日立航空機立川工場	静岡	0～2/10	101/131	8	13	5	
97	４月26日	宇佐飛行場	なし	10/10	18/21		2		
98	４月26日	大分飛行場	なし	10/10	19/22		2		
99	４月26日	佐伯飛行場	なし	10/10	19/23				
100	４月26日	富高飛行場	なし	10/10	21/22				
101	４月26日	松山飛行場（今治飛行場）	なし	10/10	15/37		16		
102	４月26日	新田原飛行場	なし	10/10	18/23		2		
103	４月26日	宮崎飛行場	なし	10/10	19/21		1		
104	４月26日	鹿屋飛行場（国分飛行場）	なし	10/10	19/22		2		
105	４月26日	串良飛行場（宮崎飛行場）	なし	10/10	13/22		9		
106	４月26日	国分飛行場	なし	10/10	17/22		3		
107	４月26日	都城飛行場（宮崎飛行場）	なし	10/10	17/21		3		
108	４月27日	出水飛行場	なし	晴れ～2/10	21/22			1	0（1）
109	４月27日	宮崎飛行場	なし	2/10	21/21				
110	４月27日	国分飛行場	なし	0～2/10	19/22				
111	４月27日	都城飛行場	なし	0～2/10	14/18				
112	４月27日	鹿屋飛行場	なし	晴れ	20/21				
113	４月27日	串良飛行場	なし	晴れ	17/19			1	0（9）
114	４月28日	出水飛行場	なし	0～2/10	23/24				
115	４月28日	宮崎飛行場	なし	0～2/10	20/20			1	0（11）
116	４月28日	国分飛行場	なし	0～2/10	17/20			1	0（1）
117	４月28日	都城飛行場	なし	0～2/10	17/19				
118	４月28日	鹿屋飛行場	なし	0～2/10	22/23		1		
119	４月28日	串良飛行場	なし	0～2/10	23/23			1	0（12）
120	４月29日	宮崎飛行場	なし	1～2/10	19/21				
121	４月29日	都城飛行場	なし	1～2/10	22/23			2	0（16）
122	４月29日	国分飛行場	なし	0/10	22/22				
123	４月29日	鹿屋東飛行場	なし	0/10	14/15				
124	４月29日	鹿屋飛行場	なし	0～1/10	18/20				
125	４月29日	串良飛行場	なし	0～1/10	16/20				
126	４月30日	立川陸軍航空工廠，浜松市	日本楽器	6～10/10	69/106	9	14		1（0）
127	４月30日	鹿屋飛行場	なし	0/10	11/11				
128	４月30日	鹿屋東飛行場	なし	0/10	10/11				
129	４月30日	国分飛行場	なし	0/10	5/10				0（1）
130	４月30日	大分飛行場	なし	9～10/10	11/13				
131	４月30日	富高飛行場	なし	0/10	11/12		1		
132	４月30日	佐伯飛行場	なし	7/10	11/11				

（出所）前表に同じ。

第39表は，各作戦の第２目標，目標上空の天候，第１目標投弾機，第２目標投弾機，その他有効機，損失機の機数と死者・行方不明者をまとめたものである。目視第１目標とレーダー第１目標の２目標が設定される場合と第２目標が設定されるケースがあるが，数としてはそれほど多くない。また，当然のことながら，目標上空の天候が悪い場合や夜間の爆撃では，第１目標投弾率が低下する傾向にある。それは，第２目標投弾機やその他の有効機の数にも表れている。損失機については，４月１日の中島飛行機武蔵製作所６機，東京陸軍造兵廠地域７機，川崎市街地11機，日立航空機立川工場５機などがめだっている。例えば，４月１日の場合は，目標上空で敵機により１機，対空砲火により２機，離陸直後のクラッシュ１機，目標までの途

上での衝突２機，計６機であった。理由が不明な場合が多いが，とくに関東地域の航空機工場や市街地の作戦に対する作戦にたいしては，日本軍機の邀撃や対空砲火が激しかったことに起因しているものと思われる。

さて，日誌に戻ろう。日誌は４月１日から４月３日までは記述なく４日から再開される。１日～３日の間も既述のように大規模作戦で航空機工場や市街地，機雷投下作戦が行われた他，従来通り気象観測爆撃機や写真偵察機も来襲している。後者の少数機の動向は，第40表に示す通りである。１日には気象観測爆撃機 WSM333～334の２機，２日には WSM335～337の３機，写真偵察機3PRM113～115の３機，計６機，３日には，WSM339～342の４機，3PRM117の１機，計４機が来襲した。目標地域が西日本や西南諸島が多いなか WSM333，WSM336，WSM341の３機は目標地域が東京となっているが，豊橋地域では警戒警報は発令されなかったようである[20]。

この３日については『朝日新聞』には次のような記事がある。「一日朝関東地区へ来襲したB29一機」（４月２日付），「一日午前９時半頃から二日午前二時頃までにB29六機が瀬戸内に，同一機が山口県下に侵入」（４月３日付）「B29の各一機は二日午前九時前近畿地方，同九時帝都附近，同十二時すぎ広島南方，同午後十一時半ごろ高知，松山附近，瀬戸内海を何れも偵察した」。

なお，第37・38表にも示すように，４月１日～３日には，作戦任務番号51～57までが実施されている。作戦任務番号55～57については，爆撃時間が日本時間で４日に入っているので後述することにする。作戦任務番号51は，中島飛行機武蔵製作所への爆撃である。出撃した121機のうち115機が日本時間２日00時02分～02時29分にかけて，5,830～7,960フィート（1,766～2,411メートル）から主に M-64，500ポンド GP4,346発（1086.5トン）投下した。この爆撃で特徴的なのは，弾底遅延信管で６時間のものを一部，使用したということである[21]。爆撃の結果は，思わしくなく，爆撃後の写真は新たな損害は確認されなかった。作戦任務番号52～54はスターベーション作戦で呉港および広島水域が目標となった。目標に敷設した機雷数は，それぞれ48個，78個，83個であった[22]。

四月四日

（153）硫黄島に補給基地を前進せしめた敵の我が本土に対する空襲は，これまでより一層頻繁に一層激烈化するだらうとの予想を裏切つて，去る三十日夜名古屋来襲この方，四五日の間空襲らしい空襲にも出会はず聊か評子ぬけの形で，それに桜は今が真盛りだし，気候は熱からず寒からず。これで戦争さへなくば全く世は太平の春だが，日に日に迫る敵影に，今，町では物資の疎開にゴッタ返しの真最中。伝手を求めては家財を田舎へ田舎へと送るに大童。その夜を日についだ荷物の行列は，群集心理をあまり人心をいやが上にもいらだたせるのに加へて，沖縄列島めがけて敵が強引に上陸をやり出し，戦ひの前途思へば夢円（まろ）らかならぬ。

午前一時二十分，警戒警報のサイレンが高らかに鳴り出した。素破，空襲とはね起きる。空は曇りで，弦月あれどなきが如く，脚下さへも定かでない。情報をきくと，南方洋上を北進する敵機編隊があるといふ。いよいよくるなとまち構へると，くるやつくるやつが伊豆半島やら駿河湾方面にとび込んできては東北に向つてゆく。どうも今夜は帝都に向ふらしく，こちらにくる様子がないので二時十分，愛知県に警戒快報が解除された。帝都はこれからが大変だらう。彼を思ひこれを思ひ，まじまじ眠りもやらず明かして仕舞つた。

20）『豊西村空襲記録』によれば，浜松地域では１日は06時50分，２日は02時10分と08時35分の２回，警戒警報が発令されている。

21）「作戦任務報告書」No.51. また，『朝日新聞』（1945年４月３日付）は，「今回の来襲の特徴は攻撃に先立つて照明弾を投下したこと，時限爆弾（五十分乃至五時間の時限）を使用したことである」と報じた。

22）詳細については，前掲，工藤洋三（2019）86～87頁。

第40表：1945年４月１日～７日の気象観測爆撃機および写真偵察機

月日	作戦	出撃時刻（マリアナ時間）	出出撃時刻（日本時間）	到着予想時刻（日本時間）	帰帰還時刻（マリアナ時間）	目標（地域）
４月１日	WSM333	010110K	010010	010710	G011540K	東京
	WSM334	010720K	010620	011320	G012245K	神戸
４月２日	WSM335	011819K	011719	020019	S021100K	対馬海峡
	WSM338	［020023K］	［012323	［020623］	G021423K	沖縄
	3PRM113	［020220K］	［020120］	［020820］	G021620K	東京・横浜
	3PRM114	［020227K］	（中止）		G021627K	九州地域
	3PRM115	［020227K］	［020127］	［020827］	G021627K	姫路－舞鶴・京都
	WSM336	［020515K］	［020415］	［021115］	G021915K	東京
	WSM337	［020605K］	［020505］	［021205］	G022005K	呉－高知
４月３日	WSM339	021804K	021704	030204	G030835K	対馬海峡
	3PRM117	030155K	030055	030755	G031545K	九州地域
	WSM340	030645K	030545	031245	G032135K	対馬海峡
	WSM341	030810K	030710	031410	S031920K	東京
	WSM342	031722K	031622	032322	S040610K	神戸
	3PRM116	（延期）				広島－呉
４月４日	3PRM120	040309K	040209	040909	G041655K	東京地域
	WSM343	040613K	040513	041213	G041853K	東京地域
	WSM344	040616K	040516	041216	S042110K	呉－高知
	WSM345	041759K	041659	042359	G050945K	九州地域
	3PRM116	（延期・不明）				
	3PRM118	（延期）				
	3PRM119	（延期）				
４月５日	WSM346	050930K	050830	051530		対馬海峡
	WSM347	［050550K］	［050450］	［051150	G051950K	浜松
４月６日	WSM348	051803K	051703	060003	S060850K	神戸－大阪
	73RSM1	051819K	051719	060019	S060900K	浜松，静岡，玉島
	3PRM118	060248K	060148	060848	G061725K	立川－小泉
	3PRM119	060153K	060053		G060347K	呉－関門海峡
	3PRM121	060258K	060158	060858	G061720K	呉・関門海峡
	WSM349	060421K	060321	061021	G061945K	対馬海峡
	WSM350	060620K	060520	061220	G062007K	三菱名古屋航空機製作所
４月７日	WSM351	061901K	061801	070101	070905K	浜松－済州島
	WSM352	（中止）				神戸
	3PRM122	070203K	070103	070803	G071514K	福岡・関門海峡・呉
	3PRM123	070207K	070107	070807	G071740K	高崎－長野
	3PRM124	070227K	（中止）			名島埼－志賀崎の航路
	3PRM125	（不明）				東京・小泉
	3PRM126	070451K	070351	071051	G072055K	九州北西沿岸，本州北沿岸÷呉
	3PRM127	070218K	070118	070818		京都－勝浦の航路
	3PRM128	070247K	070147	070847	I071450K	犬吠埼－駿河の航路
	3PRM129	070223K	070123	070823	I071457K	横浜－今津の航路
	WSM353	070611K	070511	071211	G072030K	佐伯海軍基地

注：Ｋはマリアナ時間を表し，日本時間はＫマイナス１時間である。日本到着予想時刻は出撃時刻に７時間をプラスしている。元資料に出撃時刻の記載がない場合は，帰還時刻からB-29の平均的な往復時間である14時間をマイナスして出撃時刻を推定した。その場合は［　］に入れて示してある。

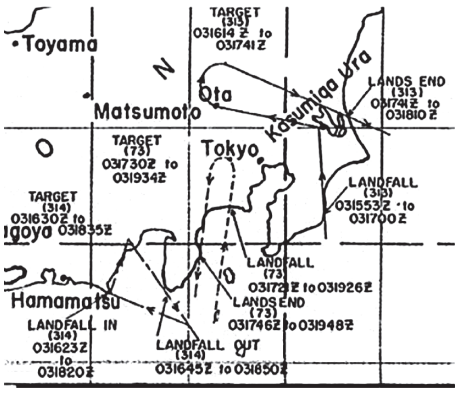
（出所）「作戦要約」より作成。

［解説］新年度の日誌は，４月４日からであるが，「空襲はこれまでより一層頻繁に一層激烈化するだらうとの予想を裏切つて・・・四五日の間，空襲らしい空襲にも出会はず聊か評子ぬけ」という記述ではじまる。この記述から４月１日～３日は，豊橋地方ではB-29来襲による

警戒警報は発令されなかったことが読み取れる。しかし，それとは裏腹に「日に日に迫る敵影に，今，町では物資の疎開にゴッタ返しの真最中。伝手を求めては家財を田舎へ田舎へと送るに大童」で，「その夜を日についだ荷物の行列は，群集心理をあおり人心をいやが上にもいらだたせ」る状態だと記している。しかも，新聞はすでに沖縄上陸の緊迫した様子を伝えており，「沖縄列島めがけて敵が強引に上陸・・・戦ひの前途思へば夢円らかならぬ」思い，すなわち，戦況がきわめて厳しいのは誰の目にも明らかであった。

日誌によれば，４日01時20分に警戒警報が発令された。情報によれば「敵機編隊が・・・伊豆半島やら駿河湾方面にとび込んできては東北に向つて」行ったようである。３日から４日にかけては作戦任務番号55（静岡航空機工場），同56（小泉飛行機製作所），同57（立川飛行機会社）が実施された。第52図の┅┅は，静岡航空機工場を目標にした314航空団の飛行コース，━━━は小泉飛行機製作所を狙った313航空団のコース，------は立川飛行機工場を爆撃した第73航空団のコースである。日誌の警戒警報の対象になったのは，コースからみて314航空団の49機と考えられる。４日01時30分から03時35分にかけて7,000～9,000フィート（約2,121～2,727メートル）の低高度から静岡航空機工場（正式には，三菱重工業静岡発動機製作所）に対して精密爆撃を行った。投下したのはM-64，500ポンドGP，M-76，500ポンド焼夷弾，M-26，53ポンド照明弾であった。米軍資料によれば爆撃による被害は工場全体の２％に過ぎず[23]，大半はそれて静岡市沓谷や清水市港町などへ投下され194名の死者を出した[24]。

この日の少数機の来襲は，米軍資料（第40表）によれば，気象観測爆撃機 WSM343～345の３機，写真偵察機3PRM120の１機，計４機であった。いずれも豊橋地域では警戒警報の対象にならなかったが，『朝日新聞』は，４日の少数機の来襲については報じていない。



第52図：４月３日の静岡・立川・小泉空襲の飛行コース

（出所）「作戦任務報告書」No.55－57.

四月五日

（154）桜さく我が日の本へ見物ながらか，志摩半島めざして北上する敵一機がある。十一時五十分，いよいよ近づくままに警戒警報が発令された。彼方此方のサイレンが高く低く鳴り出した。瓦町の通りでは，今方，警防団の検閲が済んだ許りだ。昼食の箸を捨てて立上り，合図の太鼓を打つて組内へ知らせる。この頃，来敵空襲の鈍化に防空陣も気乗りせぬこと夥しい。

情報によると，この敵機は志摩半島に到達の後，相変らず北進を続けたが鈴鹿附近から一寸道草をくつて近江路に出，八幡から関ヶ原，岐阜をかすめ東行して静岡方面へ出て仕舞つた。今か今かと西天を見詰てゐた我々，まんまと一杯喰された形ち。○時四十分，警戒警報解除され，やれやれ。

23）「作戦任務報告書」No.55. また op. cit. , Mark Lardas（2019）pp.56-57によれば，ルメイは４月３日には３航空団をそれぞれ三菱重工静岡航空機工場，立川飛行機会社そして中島飛行機小泉製作所に出撃させた。結果はそれ以前の試みと同様であった。こうして，４月７日からはP-51による援護をスタートさせるとともに，昼間の作戦任務を再開することになる。静岡航空機工場の作戦については，op. cit., Gordon B. Robertson Jr.（2017）, p.111も参照。

24）今井清一編（1981）『日本の空襲 - 四』三省堂，233頁，254頁。新妻博子（2010）『空から戦争がふってきた』静岡新聞社，32頁。

けふから四十年前の軍服を出して一着に及び，老て尚，矍鑠（かくしゃく）たる処を老い人たちに見て貰ふことにする。

［解説］11時50分，「志摩半島めざして北上する敵一機」に対して警戒警報が発令された。日誌の筆者は「合図の太鼓を打つて組内へ知らせる」。「瓦町の通りでは，今方，警防団の検閲が済んだ許りだ」とあるが，この「警防団の検閲」は，物資の疎開に対する検閲であろうか。それとも都市部からの人々の自主的な避難に対する規制であろうか。日誌の筆者は，この日から「四十年前の軍服を出して一着に及」ぶことになったと記している。すでに60歳を過ぎた高齢とはいえ，事態の緊迫を感じ取った彼なりの決意を再確認するためであろうか。

米軍資料（第40表）によれば，気象観測爆撃機 WSM346～347の２機が来襲したことになっている。警戒警報の対象になったのは WSM347（浜松）であろう。『朝日新聞』は，「B29一機は五日午前一時すぎ南九州を偵察した。またB29一機は同日正午頃志摩半島から侵入，岐阜県南部，静岡県北部を経て伊豆半島から脱去した」（1945年４月６日付）と報じた。前者は WSM345（九州），後者は WSM347（浜松）であろう。

四月六日

(155) 五日といつても，六日といつてもよい，夜半の〇時十分前，けたたましく鳴り出した警戒警報のサイレンに夢破られてはね起きる。

聞けば，志摩半島から侵入した敵一機，名古屋をめざすらしいとの情報。やがてこちらへくるものとまち構へると，果して十分たつかたたぬうちに西の方から例の爆音が聞へてきた。あちらでもこちらでも待避の鐘が八釜敷く鳴る。敵は，市の南方を通つて東南の方に去つた。処が情報では，知多半島の中部を北進，今にも名古屋上空へ侵入するらしいやうにいふ。はて不思議，まだ別の敵機がゐるのかと迷はされたが，そのうちに東方に当つて北進するらしい爆音が聞へたが，間もなく消えて仕舞つた。この頃になつて漸く，情報で，敵は浜名湖附近を旋回中だといふ。暫くすると，この敵は南方へ脱去したとて，一時十分，警報の解除を見た。その頃，外に潮岬方面に敵一機ありといふがこちらへ来る様子もないらしい。

(156) 前の敵機を送りやれやれと一眠りするかしない一時二十分，又しても警戒警報のサイレンが鳴り出した。睡いめをこすりこすり，起きて見ると，今も東の山から利鎌のやうな月が出たところ，昨日からの北風で気温頓に降下，何分にも寒くて仕方がないので，又とつて返しジャケツを着込んで再び戸外に立つ。

情報によると，先に潮岬方面にゐた奴であらう，若狭湾方面で旋回中だといふ。こやつやがて南進に移り，高山から名古屋，岡崎を経てこちらにくるらしい。まもなく爆音が聞へてきた。探照灯が二筋大空に向つて流れる。敵は，市の西方を南に向つてゆくらしい。待避の鐘がまた鳴り出した。まもなく爆音は東南の空に消える。暫くして情報で，敵は渥美湾東部から南方洋上に脱去したとて，二時に近くこの警報も解除になつた。何分にも寒くて仕方がないので，焚火に暖をとりながらこれを誌し終つてまた床につく。時に午前三時。

(157) 昼食を済して一休みしてゐると，突如，警戒警報のサイレンが鳴り出した。自分の責任上，直ちに合図を打つて組内に知らせる。何処から侵入したのか聞き漏したが，名古屋上空を侵して東進する敵一機ありといふので，待ち構へたが遂に姿を見せず，鳳来寺山，秋葉山附近を経て浜松の東方に出たので，僅か三十分で警報は解除となつた。

発令〇時二十分，解除〇時四十分，ほんの僅かの間であった。

［解説］４月６日には，日誌によれば，先ず「夜半の〇時十分前」「志摩半島から侵入した敵一機」に対して警戒警報が発令された。それから間もない「一時二十分，又しても警戒警報のサイレンが鳴り出した」。「先に潮岬方面にゐた奴で」あるらしい。「探照灯が二筋大空に向つて

流れ・・・待避の鐘がまた鳴り出した」と様子をつづっている。警報解除は02時近くで，床に就いたのは03時になった。この日はさらに，12時20分に警戒警報が発令された。「名古屋上空を侵して東進する敵一機」に対するものであったが，間もなく警報解除となった。

米軍資料（第40表）によれば，気象観測爆撃機 WSM348～349の３機，写真偵察機3PRM 118～120の３機，そしてレーダースコープ写真撮影任務の73RSM の１機，計７機が来襲したことになっている。00時10分前と01時20分の警報は73RSM（浜松・静岡）に対するものであろうか。また，12時20分の警報は WSM350（三菱重工名古屋航空機製作所）に対するものである。

『朝日新聞』は「六日午前零時過より同二時頃にわたり B29一機は紀伊半島，淡路島，岡山方面に行動し，高知附近より脱去，投弾なし，六日午前九時過ぎ B29一機九州東南方から福岡国東半島および厳島附近を経て高知附近から脱去，同九時半 B29一機浜松附近から甲府，太田を経て小名浜から脱去，同十一時前 B29一機四国南部から山口県に入り国東半島から脱去，以上の三機は投弾なし，また正午過ぎ B29一機紀伊半島南方から侵入名古屋に投弾して豊橋付近から脱去した，別に B24二機が九州南部地区を行動，投弾はなかったが大陸からか南方からか作戦基地は不明である」と報じた。

四月七日

（158）船町といへば，自分が半生を過した縁故の地，その船町出身の英霊一柱帰還される。けふ，その出迎番に当るのも何かの縁と組を半分づつに分けた六人で駅へ向つて出かけた所，十歩と行かないうち警戒警報のサイレンが鳴り出した。時は午前八時三十分，かねてこの事あるを期し，警報発令中は出迎へも特殊関係者のみと定められてあるので，諸君には帰つて貰ひ私一人が代表となつて町旗を担ひて駅へと出かけた。通々に聞くラジオの軍情報は大編隊の来襲を告げ，伊豆半島と志摩半島を目標に，あとからあとから編隊でやつてくるらしく，それも百機や百五十機ではないらしい。形勢いよいよ必迫，神明町辺で引返さうとしたが，また思ひ直して駅までゆくと，もう英霊は帰着され列まで整へられて居る。大急ぎで列につき町旗を立てると忽ち空襲警報のサイレンが鳴り出した。船町以外はほんの三四ヶ町の旗が並んだだけ，一同拝礼して忙はしく遺骨は我家へ，出迎人は解散となり大急ぎで家へ帰る。

十時帰宅して待機。婆さんが昨朝以来例の病気で絶食のまま寝てゐる。敵機近づくまではとそのまま寝かせて置く。

今日も敵は名古屋をめざして居るらしく，南から西から時には北から次々編隊で押しよせ，浜名湖方面に脱出口を求めてはこちらにやつてくる。先づ第一波ともいふべき三十機許りの編隊が午前十一時頃，西北から大空一杯に蔽いかぶさるやうに真上へやつて来たので無理やり婆さんを壕に入れ，自分も続いてもぐると，壕まで響く爆音に交つて高射砲が盛んに打上げられ，腹にこたへる様な炸裂音が聞へてくる。どうもうまく当らないと見へて落ちてくる奴も烟を吐くやつもないやうだ。これを皮切りに後から後からやつてくる敵機の波は五波や十波でない。そして，多くは十機乃至十四五機の編隊で中にはそれ以上のもあれば，三機五機といふ奴もあるが迚も数へ切れたものでない。

敵も名古屋にもう焼けるものもないと見たのか，けふは爆弾許りで焼夷弾は落さないといふ。そのどこへ落した爆弾か，時々爆風がやつて来て戸硝子をガタつかせる。ひどいのになると全く地震の通りで家鳴り震動するが爆音の聞へない処を見ると，余程遠い所へ落した奴だらう。こうして次々市の上空を通つて脱去する敵機の波は，一時間以上も続き爆音と待避の鐘の連続だ。午后一時，さしもの敵も大方南方基地をめがけて脱去し，軍管内また敵影絶へたので空襲警報も警戒警報も相ついで解除された。然も幸に，この附近に投弾した模様もなく被害皆無であつたことは何といふ有難いことだらう。

来襲百五十機　主として名古屋を空襲

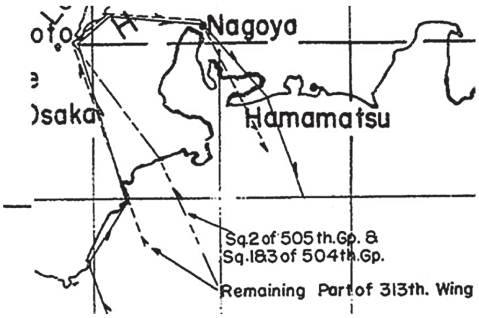
［解説］七日は「船町出身の英霊一柱帰還」にあたり，「その出迎番に当」った。しかし，「六人で駅へ向つて出かけた所，十歩と行かないうち

警戒警報のサイレンが鳴り出した」。結局，他の人たちには「帰つて貰ひ私一人が代表となつて町旗を担ひて駅へと出かけた」が，駅に着くと「忽ち空襲警報のサイレンが鳴り出した」。道々の情報によれば，編隊で夥しい数の敵機が向かっているとのことで，「同拝礼して忙はしく遺骨は我家へ，出迎人は解散となり大急ぎで家へ帰」った。なお，「組みを半分づつに分けた６人」というのは，各戸ではなく，11戸ある組の世帯数のうち２戸から１人という意味であろうか。

名古屋に向かう敵機は，次々編隊でやって来て，「先づ第一波ともいふべき三十機許りの編隊が午前十一時頃西北から大空一杯に蔽いかぶさるやうに真上へやつて来た」その後の「敵機の波は五波や十波でない」状態であった。「高射砲が盛んに打上げられ」るものの，「どうもうまく当らない」。そして「爆音と待避の鐘の連続」が「一時間以上も続」いた。

この日，米軍資料（第38表）から明らかなように，作戦任務番号58，中島飛行機武蔵製作所と作戦任務番号59，三菱重工名古屋発動機製作所がほぼ同時に爆撃された。中島飛行機については，伊豆半島から上陸して目標に向かい，爆撃ご房総半島から洋上にでるという飛行コースをとった。この作戦では，硫黄島に進出した第VII戦闘機集団のP-51，116機がはじめてB-29の護衛を行った[25]。その結果，第73航空団の101機が第１目標に対して，日本時間09時00分から同16分に11500～15,650フィート（約3,485～4,741メートル）からM-66，2000ポンドGP535発を投下した。

ただし，日誌にあるのは三菱重工に対するものと考えてよいだろう。第313および314航空団の計194機が出撃し，このうち151機が第１目標である三菱重工名古屋発動機製作所を爆撃した。第53図にみられるように，紀伊半島から上陸し，琵琶湖をIPとして名古屋に向かった。日本時間で11時03分～12時15分にかけて高度16,000～25,000フィート（約4,848～7,575メートル）から3,193発のM-64，500ポンドGPを投下した。報告書は，この爆撃では，照準点の1000フィート以内に113発が着弾し，相当な損害を与えたとしている[26]。名古屋空襲を記録する会（1985）によれば，死者366人，全焼637戸，全壊2003戸であった[27]。またこの日，老津村（豊橋），東郷村（新城），田原町，神戸村（田原）が被弾したが，山林に落下し被害はなかった[28]。日誌で「爆弾が戸硝子をガタつかせ」「家鳴り震動」させたのはこれらの爆弾であろう。



第53図：４月７日の名古屋爆撃の飛行コース

（出所）「作戦任務報告書」No.58－59.

作戦任務番号58と同59は，同時に実施されたが，P-51の掩護は硫黄島に配備された数が相対的に少なかったこと，東京地域の防備がより強力であったことなどから，作戦任務番号58の第73航空団のB-29を掩護することになった。名古屋への爆撃が１時間遅くなっているのは，東京地域の日本軍機を止め，名古屋地域からの日本軍機の一部を引きつけるためであった。ま

25）「作戦任務報告書」No.51およびチェスター・マーシャル（2001）『B-29日本爆撃30回の実録』（高木晃治訳）ネコ・パブリッシング，234～239頁参照。

26）「作戦任務報告書」No.58.

27）名古屋空襲を記録する会（1985）20頁。同資料によれば，第１目標の三菱重工名古屋発動機製作所は，主要機械の70％をすでに疎開完了していたこともあり，「残存機械ノ二〇％損害ヲ受ケタル程度ナリ建物当分復旧見込ナシ」の状態であった。

28）名古屋空襲を記録する会（1985），126頁。

た，両作戦の爆撃時刻や高度をみてもわかるように，夜間低高度精密爆撃は放棄され，再び昼間高高度精密爆撃に復帰した。

なお，４月７日の少数機の来襲は，米軍資料（第40表）によれば，気象観測爆撃機 WSM351～353の３機，写真偵察機3PRM122～129（ただし，124は中止，125は欠）の６機，計９機であった[29)]。

沖縄戦がはじまって，特攻が日本軍の主要な戦法となった。４月６日には海軍の菊水作戦，陸軍の第一次航空総攻撃が展開された。それぞれ215機，82機が出撃した[30)]。一方，６日には戦艦大和，軽巡洋艦矢矧，駆逐艦８隻，計10隻が海上特攻として，沖縄に向けて出撃した。しかし，７日，艦隊は米第58機動部隊の艦載機による２次にわたる波状攻撃を受けて鹿児島坊ノ岬沖で大和，矢矧はじめ計６隻が撃沈された。ここに沖縄は「本土から完全に遮断され完全に孤立化するにいたった[31)]」。こうした事実は，『朝日新聞』では「戦艦をはじめとする我が水上部隊が初の特攻隊として敵艦艇群に壮烈な斬込みをかけ，戦艦以下五隻が・・・華と散った」（1945年４月９日）と報じられたのみであった。沖縄戦は，日誌の筆者が生活する豊橋からは遠い世界の話であったが，日本軍の戦果を伝える虚報にもかかわらず，戦況が極めて深刻であることは市民の実感として共有されていたように思われる。沖縄は明日の豊橋のすがたとも考えられなくはなかったのである。

＜次号につづく＞

29）原田良次（1973）（下）は，４月１日から７日の少数機の来襲を次のように記している。２日「〇八五〇，一一四〇各B29一機来襲，戦果偵察ならん」，３日「〇八五〇，一一一〇の二回 B29一機来襲」，４日「一一三まる B29単機で侵入」，５日「正午 B29一機来襲だけ」，７日「一三三〇 B29一機飛来，爆撃戦果の偵察ならん」。

30）前掲，沖縄県（2017）127頁。

31）米総務省編（1997），125頁。